

平成25年度 小学校からの教科専門性向上事業 実施報告書

教育委員会名

高山市教育委員会

1 学力向上チャレンジ校名・責任者氏名

ふりがな	みやしょうがっこう	ふりがな	なかがわ よしお
学校名	宮小学校	校長氏名	中川 善夫

2 取組内容

(1) 組織・指導体制に関わる取組内容

①教科担任制を活用した効果的な指導体制の工夫

職員の専門教科を生かし、2年生以上の学年で教科担任制を実施することによって、より専門的な指導が可能となり、児童の確かな学力の定着へとつながると考えた。

2年生	音楽 図工 体育	3年生	理科 音楽
4年生	社会 理科 音楽 体育	5年生	社会 算数 理科 音楽 図工 体育 外国語活動
6年生	社会 算数 理科 図工 体育 外国語活動		

- ・6年生では、教科と外国語活動の授業において67%が教科担任の授業
- ・5年生は、72%が教科担任の授業

②小中連携による少人数指導やTTを併用した柔軟な指導体制

- ・算数科では4年生以上で、少人数指導・TT指導を実施
特に、6年生では、学級担任と中学校の数学教師が指導を行うことで、より専門的な授業を行うだけでなく、中学校の数学教師の指導を通して、担任が算数の専門性について学んだ。
- ・算数以外にも、TT指導を行う教師どうしが一緒に教材研究や、授業をすることを通して専科の教師から専門的な指導の方法を学んだ。
(5・6年の外国語活動、6年生の図工や5年生の理科などで実施)

(2) 運営(組織・計画の運用)に関わる取組内容

教科担任制を実施するにあたって、私たち教員が大切にしなければならないことの一つに、「児童理解」がある。まず、どの子にも目を行き届かせるために、学級担任と教科担任との教室交代の時には、授業開始時刻前に教室や特別教室に移動し、常に教員が教室にいるように心がけた。

また、以下のように「子どもを語る会」を実施し、配慮の必要な児童の様子について全職員で共通理解をし、みんなで気にかけて指導をしていくことを確認してきた。

①月1回の「子どもを語る会」

個別支援等を必要とする児童の様子を全教職員で交流する「子どもを語る会」において、教科担任から出された授業での望ましい姿や支援を必要とする点などを共有することで、他の教職員がその児童に対して意図的に褒めて価値付けたり、支援をしたりする。

②小中合同の「子どもを語る会」

個別支援等を必要とする小・中学校の児童生徒の様子を小・中学校の全教職員で交流する「小中合同子どもを語る会」を通して、授業や小中合同運動会などの合同行事において配慮すべきことや効果的な指導方法について共有し、支援に役立てる。

(3) カリキュラム・指導方法等に関わる取組内容

以下の5点について、児童生徒の発達の段階を考慮して指導方法を工夫し、授業に臨んだ。小・中学校の教員が、互いにそれぞれの研究授業や公開授業を参観し合ったり、合同の授業研究会を行ったりすることを通して、9年間をかけて同一歩調で指導し成果や課題を共有した。

①「宮の子の聞き方・話し方」の定着を図る指導

- ア 聞き方・話し方の目標となる段階表を小・中学校すべての教室に掲示して、児童生徒も教師も意識しながら授業を行う。
- イ 児童に身に付いたかどうかを見届け、達成できた項目にリボンを貼って示し、価値付ける。

② 学習の流れやポイントが明確な板書計画

- ア 課題は赤色、まとめは青色で囲むなど、基本的な板書の在り方を小・中学校で統一する。

<p>イ 児童が板書を手がかりにして本時のまとめを自分の力でノートに書けるように、授業のポイントとなる事柄を端的に板書に位置付ける。</p> <p>③ 自分の考えがきちんと位置付いた学習の足跡が残るノート指導</p> <p>ア 一人学びの時には、理由（わけ・根拠）を明らかにして自分の考えを書けるように、体験等の事実、既習のノートや掲示物、教科書の関連部分の情報等を与える。</p> <p>イ 仲間の意見で参考になったことや、新しく気付いたこと等は青色で書き加えて、より広がりのあるノートづくりができるように指導する。</p> <p>④ 「仲間学び」で考えが深まる意図的指名の工夫</p> <p>ア 一人学びにおいて、ノートを見届け、児童の考えを把握し、指名計画を立てる。</p> <p>イ 仲間学びにおいて、発言の関連性や考えの深まりを考慮しながら意図的に児童を指名する。</p> <p>⑤ 本時のねらいの達成に結び付く問い返し発問の工夫</p> <p>ア 児童の発言を予想し、その発言からさらにねらいの達成に向けて深まりのある話し合いができるように発問を準備する。</p> <p>イ 立ち返るところ（ノート、文章、式、図等）を明確にした上で、そう考えた理由（わけ・根拠）を常に問うようにする。</p>
<p>(4) 教員研修に関わる取組内容</p> <p>① 小中合同研究会の実施</p> <p>小・中学校の9か年を見通した教育活動を推進していく中で、確かな学力を身に付ける指導を確立する。そのために、次のことを実施した。</p> <p>ア 小中合同研究推進委員会を設置し、小中連携を図った研究推進の方向性を示すとともに、日程等の調整をする。</p> <p>イ 9か年を見通して児童生徒を育成するための研究構想を作成し、教員の意思統一を図る。</p> <p>ウ 研究授業は、できる限り小・中学校すべての教員が参観し、小中合同授業研究会において、研究内容等について議論・検討し、指導方法の工夫改善を進める。</p> <p>エ 毎年、小中合同研究公表会を開催し、研究の成果や課題を明らかにする。</p> <p>② 専門的指導力を高める学習会</p> <p>専門的な指導力を向上させることを目的として、教員同士が互いに学び合う機会を計画的に設定する。</p> <p>ア 高山市教育研究所や宮中学校の数学科教師と共に、授業づくりのための学習会をもつ。</p> <p>イ 算数における少人数指導のための教材研究を、学級担任と少人数担当教師で毎日行う。</p>
<p>(5) その他</p> <p>5月と10月、2月に5・6年生の児童とその保護者、全教職員に教科担任制に関わるアンケートを実施し、その結果を分析して実践のための参考にした。</p>

3 成果

<p>(1) 児童の学習状況に関わる成果</p> <p>① アンケート結果から</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「各教科の先生は、勉強をわかりやすく教えてくれていると思いますか。」という質問には、92%の児童が「わかりやすい。」と答えた。4月24日に実施された全国学力・学習状況調査の児童質問紙では、「算数の授業の内容はよく分かりますか」という問いに「あてはまる」「どちらかと言えばあてはまる」と答えているのは合わせて75.8%である。約16ptの向上が見られた。 ・「前年度までより、各教科の勉強が得意になりましたか。」という質問には、73%の児童が「得意になった」と答えた。 ・「教科の専門の先生が授業をしてくださることはいいことだと思いますか。」という質問には98%の児童が「いいことだと思う」と答えた。 ・「わかる」「できる」授業を実感することができたことや、学び方を身に付けることができた。そのため、進んで活動したり、自分の力で考えたりすることができる児童が増えてきた。 ・教科担任制を実施することにより、多くの職員と関わり、ほめてもらうことが多くなることで、自信をもって学習に臨むことができた。 <p>② 全国学力・学習状況調査の再検査結果より（平成25年12月実施）</p>

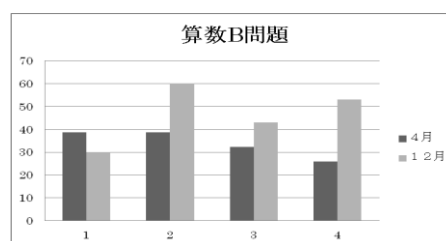
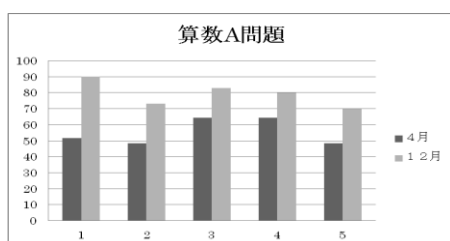
県、全国の平均正答率を下回った算数の問題について4月の結果と比較した。

A問題

- ・県、全国平均正答率を下回った5つの問題全ての正答率が向上した。
→ 5問平均 23.72pt 向上 (4月の全国平均より、+11.98pt)

B問題

- ・県、全国平均正答率を下回った4つの問題のうち3問の正答率が向上した。
→ 4問平均 12.63pt 向上 (4月の全国平均より、+ 1.35pt)



無回答問題

- ・ A問題 (5問平均) 4月 1.28% → 12月 0.00%
- ・ B問題 (4問平均) 4月 8.88% → 12月 0.00%

(2) 教員の意識等に関わる成果 (アンケート結果等より)

- ・ 教師は、中学校との連携や、教育事務所・教育研究所の指導を受けながら算数科に絞って研究を進めることで、算数科はもちろん、それ以外の教科にも、授業づくりに対する力と自信が身に付いてきた。
- ・ 放課後の職員室では、算数をはじめとする授業づくりや、児童の様子について、交流し合い、学び合う姿が、以前よりも一層見られるようになった。
- ・ 児童を多面的に捉えたり、他の教師の子どもへの捉え方から学んだりする機会も増えている。

(3) 保護者の意識等に関わる成果

アンケートの結果、5・6年生の保護者は、ほぼ全員が教科担任制について「よい」と考えていた。具体的な意見には、次のようなものがあった。

○先生の専門教科を教えていただけて、専門的な内容の濃い授業を受けられると思うのでよい。

○いろいろな先生とふれ合うことは、視野が広がるなど、とてもよいことだと思う。

○中学校へスムーズに移行できると思う。

○教科担任制になったことで、子どもが多く先生の目線(見方)で見ただけで、よいのではないかと思う。

中には、子どもの人間関係に問題が起きた時に、担任の先生がすぐに気付いて対応できるか、というような不安を感じる保護者もいた。そこで、教科担任制について保護者の理解を図るために、学校だよりで目的や方法について知らせたり、PTA総会で学校長が説明したりした。さらに、7月のPTA授業参観や10月の公表会では、6年生の算数で担任と中学校の数学教師による少人数指導を公開した。

そのようなはたらきかけにより、学力向上のための「教科担任制」についての保護者の理解が深まった。

4 次年度以降の見通し

(1) 組織・指導体制に関わる取組に関わって

教員の専門教科、経験年数等を考慮しながら、今年度同様、できるだけ多くの学年・教科で教科担任制の授業を仕組んでいく。

(2) 運営(組織・計画の運用)に関わる取組に関わって

「児童生徒を語る会」の定期的実施を通して、情報交換を図る一方で「小中合同教科部会」を設けて、教科の専門的指導の在り方を学ぶ。

(3) カリキュラム・指導方法等に関わる取組に関わって (次年度の重点)

- ①本年度の取り組みを通し、今後の実践に活かしたいよき

ア 算数科における本質に基づいた専門性の高い授業

- a 教師の専門性の1つ → 系統性、発展性を考えた授業ができる。

◇他学年とのつながり（学習内容）を示す。

◇身近な生活とのつながりを示す。

- b 一人学びにおける「教科の言葉」を使ったアウトプット

◇式と答えを導き出したときの考えを、声に出しながら整理させる。

・手の動きやブロック操作を通して場面の話をする。（低学年）

・理由（わけ・根拠）を明らかにしてノートに書く。（高学年）

イ 「仲間学び」で話し合いが深まるための工夫がある授業

- a ノートに自分の考えが書けるための工夫

◇フィードバック情報を与える。

・既習内容のかかれた掲示物、既習ノート、教科書、ヒントカード、自作資料

・操作活動

◇仲間の意見等をノートに「青色」で書き加えて自分の考えを広げることがを推奨する。

- b 精練された板書

◇1時間の流れがよくわかる見やすい板書を工夫する。

・大きな絵、大きな文字で書かれたキーワード

・ブロック、資料等が見やすい場所に位置付けてある。

・チョークの色を効果的に変えて使う。

- c 意図を明確にした「問い返し発問」の工夫

◇出口の子どもの姿をイメージする。

・課題解決に必要な考え方、技能は何かを明らかにする。

・子どもが「まとめ」で何と言えれば（書ければ）よいか、具体的にする。

- d 意図的指名の工夫

◇あらかじめ、予想される子どもの考えを明らかにしておく。

◇机間指導を通して、子どもづかみをする。

◇仲間学びで、最初に指名する子を明らかにする。

◇挙手していなくても指名したい子（発言させたい子）を明らかにする。

②さらに子どもたちに力をつけるために実践すること

ア 子どもの発言自体が深まりの手だてとなる。

- a 「仲間学び」の中で、子どもたち自身が話をつなぎ、方向付け、まとめをすることができるための教師の役割を明確にする。

◇話し合いを組織化する。

・「まとめる」「視点をかえる」「問いを全体に広げる」

・教科の本質に迫る発言を逃さない。

◇深まりにつながる手だてを講じる。

・問い返す → 揺さぶる

・思考のズレ、対立を明確にする。

・子どもの発言の流れや中身によって問い返しを吟味する。

- b 「一人学び」で考えを持たせる・つかむ。

◇机間指導では必ず全員の考えをもたせる。

◇机列表を子どもづかみに活用する。

イ 家庭学習の工夫

- a 基礎的・基本的な知識・技能を活用する。

◇国語の読解、算数の文章題も位置付ける。

- b 読み取る力を育てる。

◇読書を推奨 → 長文を速読できるぐらい読む。

- c 書く力を育てる。

◇条件作文を書かせる。

◇間違った文字や文は直させる。

(4) 教員研修に関わる取組に関わって

小中合同研究会の継続実施とともに、飛騨教育事務所、高山市教育委員会の指導主事のご指導を受けながら、小中合同教科部会の学習会を定期的実施する。